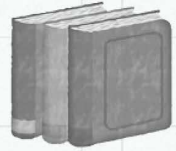




# 発掘 文学の宝



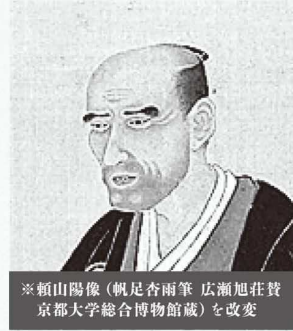
荅北町が誇る文学の宝・頼山陽。その魅力を、多くの来訪者を長年案内してきた地元ガイドが臨場感ある語り口で紹介します。現地で案内を受けているように楽しめるコラムです。

企画 ドットワークス/下川嘉奈

## 頼山陽

1780年1月21日生 -  
1832年10月16日没

歴史家、思想家、  
漢詩人、文人



※頼山陽像(帆足杏雨筆 広瀬旭莊賛 京都大学総合博物館蔵)を改変

### 「泊天草灘」誕生秘話

神崎 雄史郎

頼山陽は、儒学者頼春水の長男として生まれました。17歳の頃、江戸に出て3年後帰国。その後、突如脱藩を企てますが連れ戻され、廃嫡のうえ、自邸に約3年間幽閉されました。この間学問に没頭し、平氏から徳川までの武家の勃興を漢文で記した歴史書『日本外史』の執筆を始めました。

幽閉が解かれた後、上京して書齋「山紫水明処」を営み、各地を遊歴して文人墨客と交わり、勝れた詩や書を遺しました。

1818年、富岡の儒学者渋江龍淵を訪ねた時、天草灘に沈む夕日の美しさに感動し「雲か山か呉か越か」という漢詩「泊天草洋」を作りました。龍淵が留守だったため、弟で弟子の渋江涪灘に会い、この漢詩を龍淵に渡してくれるよう頼みました。この漢詩は、川中島の戦いを詠った「鞭声 肅肅夜河を渡る」と共に詩吟愛好家の間で有名です。

聖地である荅北町では、平成31年(令和元年)まで吟詠「泊天草洋」全国大会が毎年開催されてきました。頼山陽公園にある説明板のスイッチを押すと、平成9年の第3回大会で最優秀賞に選ばれた、前田まさよしさん(岡山市)が吟ずる歌声を聞くことができます。

大ベストセラーとなり日本人の心の拠り所として、幕末の尊皇攘夷思想に大きな影響を与えました。

富岡の西海岸に面した天草灘を一望できる頼山陽公園には、この漢詩を刻んだ記念碑が建っています。荅北町文化財保護委員だった大仁田喜義さんの『史跡と民話を訪ねて』によると、当時の松本久太郎富岡町長が、頼山陽記念碑建設委員長になり、昭和7年10月16日、頼山陽逝去満100年(旧暦9月23日)の命日に、除幕式が行われました。碑石は富岡西海岸から陸揚げした自然石で、全体の設計は北天草電気株式会社の竹下正夫技師が行い、表面の詩は、頼山陽の真筆を頼山陽研究家の光本半次郎さんが写真に撮り、彫刻は大浦の三上石工が刻んだもので、裏面にある文と文字は、安達内務大臣が書いたものです。また、頼山陽が宿泊した富岡一丁目の旅籠「泉屋」跡地に、頼山陽宿泊跡記念碑があります。

泉屋に残る民話では、頼山陽は大酒飲で、宿を出ては街を徘徊し、部屋は落書きした

紙屑を散らかすなど、旅籠も閉口したそうですが、頼山陽が富岡を去る時、紙に牛1匹と狐2匹を描いて女中に渡します。女中は「何だ。こんなもの」と思いながら主人に渡し、主人は意味が分からず庄屋に見せたところ、これは「もうこんこん(再び来ない)」と言う意味だと言い、慌てて頼山陽を探しましたが、見つからなかったそうです。泉屋は、この絵を大切に保存していましたが、天保元年の大火で焼失してしまいました。



### 『頼山陽 上・中・下』 見延典子/徳間書店

史実を基にした長い歴史小説ですが、頼山陽という人物を知るための最初の本としておすすめです。

